

第 56 回滋賀県立美術館協議会 結果概要

1 開催日時：令和 7 年(2025 年)9 月 18 日（木）10:00～12:05

2 開催場所：滋賀県立美術館 木のホール

3 出席者

滋賀県立美術館協議会 14 名中 10 名出席

上野委員、蔵屋委員、後藤委員、西藤委員、菅谷委員、馬場委員、前崎委員、光島委員、
山下委員、山本委員

（4 名欠席：石川委員、伊庭委員、岨中委員、田中委員）

事務局

保坂ディレクター（館長）、木村副館長、山田学芸課長、西垣総務課長、
雲出滋賀県文化芸術振興課美の魅力発信推進室長、他学芸員 2 名、職員 2 名

4 会議次第

- ・あいさつ 滋賀県立美術館 保坂ディレクター
- ・委員紹介等
- ・議題

（1）協議事項

滋賀県立美術館整備基本計画の策定に向けて

5 概要

事務局

議事の進行につきましては、条例第 14 条第 3 項の規定により、会長が会議の議長になるとされています。それでは会長、これ以降の議事進行について、よろしくお願いいたします。

会長

どうぞよろしくお願いいたします。それでは協議事項「滋賀県立美術館基本整備計画の策定に向けて」を議題とします。すでに事務局から事前資料および動画を事前送付させていただいておりますが、皆様お読みに、あるいはご視聴になられましたでしょうか。委員の方から資料をその場で説明するのは時間がもったいない、せっかく集まっているのですから議論を時間をかけて行いたいと要望をいただいたことを踏まえてこのような形式になったと伺っております。それでは議論をはじめますが、改めましてオンラインの方もおられますし、オンラインの方は、発言の前に挙手マーク、お名前、それから現地の方は最初にお名前を言っていただいてご発言をお願いいたします。

会長

事務局から何か補足等おありでしょうか。大丈夫でしょうか。それでは早速議論に入らせていただきたいと思います。何度もおっしゃっていただいたように、これまでいろんなことを話し合ってきて、それが相当数資料の中に盛り込まれています。本日は議会にかけ正式な計画となる前に皆様のご意見を伺い、可能なものは盛り込んでいく最後のチャンスとなります。特に子どもを中心にする

というかなり大胆な計画も出てまいりましたので、それを中心にそれぞれの専門のお立場からご意見をいただく場にしたいと思います。それでは、資料 2 の 8 ページのところから議論を始めていきたいと思います。最初に 2-1 概念図というものがありまして、こちらが今ホワイトボードに書いてあるものとだいたい似た形になっています。

図の内容について補足しますと、真ん中にふわふわのキッズアートセンターがあります。その周りに放射状にですね、一番上に現代美術展示室があり、時計回りに企画展示室、ギザギザに囲まれたアール・ブリュット、一番下に室内の彫刻庭園、滋賀ゆかりの美術工芸、県民ギャラリーと真ん中の雲を囲んで時計回りに放射状にこんな機能あったらいいというのが配されているということですね。大丈夫でしょうか。

委員

今の説明もよくわかりましたし、動画で解説していただいているので、僕の頭の中では整理できて理解できたと思います。動画と言われたのでわかりにくいかなと思ったのですが、けっこうわかりやすかったです。ただ、概念的にはわかったのですが、建物も円形に並べるものなのか、今の展示室を置き換えているだけなのか、そこがわからなかったです。

会長

機能としての概念図だけなのか、建物もこの概念図に従う形に増設されるのかということですね。いかがですか。

事務局

それはこの計画がうまくいき、来年度以降整備が進んでいく中で、ひょっとすると設計者を選定することになるかもしれません。そしてその選ばれた設計者が提案する案、あるいは我々が協議していく中で決まっていくことです。これが体現できるように、実際の配置にも置き換えられていけばよいものになるだろうとは思いますが、ただ、課題としては、キッズアートセンター、例えばキッズインスタレーションスペースはまともにやれば数百平米の面積がいると思うんですけども、今の美術館の敷地内に数百平米の建物が建てられるかどうかというのは、我々素人にはそういうオーダーをすぐには検討できないので、そこはうまくやっていかざるを得ないのかなと思っています。

会長

いかがですか。

委員

はい、わかりました。

会長

ありがとうございます。ご意見おありですか。

委員

これ概念図で、今後の活動の考え方を表すと同時にスペースやハードとしての構想という、ふたつの意味があるということですよ。活動内容といいますか、そういうところにキッズアートセンタ

ーという発想を持って来て、そこからいろいろな活動を発想していくということで、これはこの館の特徴ということで、それはいいことかなと思います。それを今度ハードに落とす、あるいは実際の活動に落としていくときに、予算という話はありませんけれども、人の問題も出てくると思うんですね。今あの体制のスタッフでキッズアートセンターという考え方を具体化していく体制が再編成なのか、あるいはもっと人がいるのか、そのあたりのことも着眼点として入れていかないといけないと思います。それからもうひとつ、滋賀ゆかりの美術と工芸、展示するときもあるんだけれども、それをより強調というかわかってもらうために開かれた収蔵庫。最近大改修するところとか新しい美術館つくるところとか必ず議論になるところだと思いますけれども、なかなかセキュリティの問題と管理の問題で、開かれた収蔵庫ってけっこう大変な設備をしなくてははいけない。人が自由に入れるところと、保存していく条件というのがなかなか折り合いを付けるのが難しい、けっこうお金がかかるといふのがあり、そのところは考えないといけない。それからもうひとつ、開かれた収蔵庫はキュレーションはしないということなんですかね、収蔵庫をそのまま見せるということは美術館で本来あるべき学芸員がどういふようにこの作品を見てほしいか、あるいはどういふストーリーでみてほしいのか、一種のキュレーションをしない空間、しないで作品を置く場所あるいは見てもらう場所になるということで、そのあたりを美術館として、それでもここはそういうスペースだというふうに考えるならそれはそれでいいと思うんですけども、そのところは美術館の姿勢として決めとかなきゃいけないところかなと思います。単にスペースの問題だけではないということです。それから室内の彫刻というのはうちも同じような発想で、結構彫刻はスペースとるんですよ、収蔵庫のなかで。それで大きなものふたつくらいが館内に常設しております。ある意味では雰囲気づくりということにもなるし、ひとつの目印ということにもなりますし、館内の導線のつくりかたという面でも、あるいはとっかかりをつくる機能も発揮しているかなと思っています。最後になりますけれども、こういう概念図に沿った形で、こういう概念があれば常にここに帰って、ここはこうしていこうということができるので、こういうものがあることがいいことだと思いますし、概念的にもここの特徴といいますか個性を作っていく原動力になるんじゃないかと思っています。そういうことでキッズアートセンターが概念を超えて現実化していくときに、それを維持できるかというのが次の課題になっていくのかなと思います。

会長

はい、ありがとうございました。今までのお話で予算はどうなっているのか、建物のデザインはどうなるのか、機能拡張したところで人は増えるのか、それから個別に収蔵庫を見せるなどいろいろ改変をすると、館の覚悟自体も変わっていかねばならない、などの論点が出ました。実はこの2-1のところは、これから個別にお話しをしていく全体像を確認するという意味でしたので、もしよろしければここで2-1 自体について話を始めるのではなく、その中のひとつひとつの要素について、次の2-2のところから出されていますので、こちらに沿ってみなさんご意見いただくというやり方でさせていただきたいと思います。では、資料の10ページ「2-2 キッズアートセンター」ですね、こちらについてご議論をいただきたいと思います。まず資料ご覧いただいてここは言っておきたいとか、これまでのお話でこれはこういう意見だというようなことがあれば挙手とお名前、ご意見を願います。

委員

まず、事前に資料の共有動画の作成ありがとうございました。大変わかりやすく議論がしやすいなと思いましたので、前回のところからリアクションいただいてありがたいと思いました。まずキ

ッズアートセンターということが出てきて、ほんとにさっと見たときなんだこれはと思いました。この美術館が子どもとのいろんな関わりを大切にしているというのはわかっていたんですけども、すごい野心的というか、とてもターゲットを絞ったものが出てきてびっくりだったのと、メリットとデメリットがあるのかなと思ったりはして、そこはみなさんのご議論を聴きたいと思いました。キッズという名前を付けることでとてもわかりやすさがあり、県民の方々にもこういった目的でここができているのかわかりやすくして広報的にも有利なのかなとか、あとは目的がはっきりするので予算の組み立てとかに使うのはメリットなのかなとは思ったのですが、キッズという的をしばることで、その他というのが捉えづらくなってしまうような名称だとも思いました。さきほどの説明でワークショップルーム、大人でも誰でも入っていいよ、もちろんインスタレーションスペースなども誰でも入れるものだと思うので、子どもというものをある種中心に据えながら、周りにいる大人たちも一緒に学べたり、一緒に何かをしていくというようなコーポレーション的なものをほんとはイメージされているのではと思ったんです。そこでキッズという名前をつけて絞ってしまうことで、ある種名前につられてしまって固定化してしまう。概念的な雲のふわふわした感じ、おそらくあれはもう少し流動的になったり、重なったりということがありえるのかなと思うんですけども、そういう部分が見えづらくなってしまうかなという懸念を持ちました。あとは子どもというわかりやすい親しみやすさみたいなものにつられてしまうような気がして、そういったイメージで親は鑑賞できるスペースとか子ども連れていきたいと思うんですけども、それだけではない美術館の役割、例えばわかりにくさであったり難しさというのも捉えてほしいという思いが僕としてはありますので、そこが見えづらくなるかなという懸念を持ちました。キッズアートセンターに関しては僕の感想でもあるんですけども、皆さんがどう感じているのかも気になって、感想を聴きたいところです。もう少し包括的な名前の方がいいのかなと個人的には思っております。以上です。

会長

ありがとうございました。子ども限定と受け取られるというメリット、デメリットについてお話いただきました。どうぞみなさま順次ご発言をお願いいたします。せっかく丸い座になって話やすい雰囲気になっています。

委員

ありがとうございます。まずは、私が前回言ったことに対応していただきまして、どうもありがとうございました。ただ、その動画からいうとたぶんこれ今まだどうなるかわかりません、これから県に出しますというところだと思えますよ。そうすると通るかどうかわからないタイミングで、動画があまり楽しそうじゃなかったのが残念で、今日も初めから暗い感じで。この時点では夢を語っているので、みんなで夢を語りたからこういうことってみんなで楽しくやりましょう。今まで私文句言ってたんですけど、それはそういう感じがなかったというか、とにかく意見きかせてください、ありがとうございました、じゃあさようならというのが嫌で、それよりもみんなでやっていって、当たって砕けたらそれはそれで仕方ないかなと思っているところがあるので、そういうところです。という意味で、今回見せていただいたキッズアートセンターは、私はとても良いと思っていて、美術館をいかに美術館と思われたいかということが大切だと思っています。例えば美術館となった瞬間にお客さんがガンと減るんですよ。よほど京セラ美術館のようにおしゃれな場所みたいな雰囲気になれば別ですけど、県立美術館と見た瞬間に人口の 8 割は行きたくないという場所になっているから、むしろ滋賀県立美術館の中の施設にしない方がいい、隣にある別施設として建てたほうが良いと私は思いました。美術館は美術館で建っているし、その隣にキッズが集まる場所がある、夏は暑す

ぎるから公園に親が連れて行こうと思わない、とすると夏場に半分公園みたいな場所としてのキッズアートセンターが公園とつながる場所にあったらそっちの方がよい。あと、この美術館も問題は学生さんに来てほしいけど来てくれないというのがあって、隣の龍谷大学は文学部がないし、今まではそもそも文学部の美術史の人しか相手にしていないような名前と機能だったのが、キッズアートセンターをつくると福祉や教育の学生など、学生の活動の場としての役割というのが見えてくるので、教育に関わっているものとしてはコラボしやすくなる感があります。今までは美術史の子や芸大のアート活動している子しか対象にならなかったが、それ以外の学生たちも行けるというのを聞いていて思ったので、そうやって人が集まって、夏に子どもたちがゆったりして、冬でもいいですけど、そういうのがあると県民の目的地になれる感じがするというか、隣に県立美術館がありますというようなほうがいいのかと思って、新たな人が来る入り口になるので、それなら新たな入り口をつくるのも通じるのかなと思いました。以上です。

会長

ありがとうございました。ただいまのお話は、美術館業界人にとってはちょっと悲しいというか、美術館と言った瞬間に来なくなるので、キッズアートセンターを別に建てたほうがよいのではないのかくらいの刺激的なご意見でした。他にいかがでしょうか。

委員

事前資料や動画、とてもわかりやすく頭にも入りやすく、作成いただきありがとうございます。まずキッズアートセンターなんですけれども、キッズアートセンターを中心に置くというアイデアを拝見してこの美術館らしいなというか、これまでも子ども連れの親子であったり、子どもがたくさん訪れて家族が過ごしやすいというイメージを作ってこれたと思うので、そのイメージの延長線上にうまく広げる形で中心におくのはよいのではないかなと思いました。先ほどもおっしゃっていたようにデメリットという部分も確かにあるかなと思っていて、キッズといったことで大人同士で来てはいけないのかとか、キッズの部分が強調されすぎると遠ざけられてしまう恐れがあると私も思いました。あとひとつ気になったのが、キッズというのがどのくらいの年齢を指すのか、乳幼児から小学生低学年くらいまでか、それとも美術館に一番来ていない中学生・高校生もキッズなのか。子どもは4年生、5年生になると理解度が高まって、乳幼児向けのイベントを楽しめなくなってしまうと思うので、せめて2段階くらいのプログラムを考えていただく必要があるのかなと、キッズといったときにどの年代を対象にするのか考えていく必要があるのかなと思いました。それ以外ですと、予約しなくても参加できるコーナーというのは、来るハードルが下がるというか、予約というひと手間がなくなるだけでお客様が来やすくなるのでよいと思いました。以上です。

会長

ありがとうございました。ただいまのお話はキッズということで来づらくなる人がいるのではないかというお話と、キッズが乳幼児なのか小学校4、5年生までなのか、そのあたりをはっきりさせた方がよいというお話でした。ちなみに当館でも子ども向けのプログラムをたくさんやっているんですが、乳幼児は乳幼児向け、4年生以上になりますと大人の入り口ということでティーンエイジャー以上大人までとした方が大人も飛び込みやすいことがわかってきて、乳幼児とティーンエイジャー以上を分けて確立する実験を行ってるところです。

委員

今お話しを聞かせていただいて、このキッズアートセンターができることによって、学校が美術館に校外学習で来させていただきやすくなるなと思いました。やはり今美術館との関わりを小学校が持つというのは少しハードルが高い、担任と美術館との打ち合わせも難しいと思っています。でも、特に1年生から4年生の子たちに向けてのワークショップルームでの活動であったり、美術館でのインスタレーションスペースというのは楽しく取り組める。小さい頃に、美術というものを身近に感じる体験ができるんじゃないかと思いました。それを小学校の間に1度でも経験しておくで自分が大人になって親世代になったときに、「そういえばああいうことがあったな」となり、足を運びやすくなるんだろうなと思いました。また、1年生から4年生までの子たちが、例えば2クラス来させてもらうとなったときに、それだけの大人数の子たちが入れる施設なのかであったり、どういう活動をさせてもらえるのか、楽しいとすることができるのか、そういう部分がまだイメージできないので、そのあたりの今後の取り組み方についても検討いただけるといいのかなと思いました。もう1点なのですが、インスタレーションスペースは子どもたちはすごく楽しんで活動していくんだろうけれども、周りの大人、親やおじいちゃんおばあちゃんの世代も一緒にその場を楽しめるような何か一工夫があるといいなと思いました。子どもたちはめっちゃ楽しむと思うんです。ぴょんぴょん飛んだり、ちょっと触ったり、ちょっとよじのぼったり、そういったからだ全体で体験できるようなものがあればいいなと思います。ほんとに大層なものではなくても、子どもって小さいタイヤが並んでるだけで飛びたくなっちゃうし、飛ばせてあげたい、それが楽しいと思う体験につながって、また大人になっても子どもにさせたいとつながっていくと思うので、簡単に遊べるようなものがあるといいなと思いました。それをおじいちゃん、おばあちゃんも楽しめる、具体的に言えないところが申し訳ないんですけど、そういうものがあるといいなと思いました。以上です。

会長

ありがとうございました。

委員

キッズアートセンターですけれども、趣旨はよくわかるし新しい試みだというのは大変よくわかるんですが、キッズとつけてしまうことに懸念はあります。先ほど他の委員もいろいろおっしゃったんですが、それに加えて子どもたちというのは親に連れてきてもらわないとここに来れないんですよ。交通というかアクセシビリティの問題があるので、親がまずここに連れてきたいと思わないと来ることができない子どもたちはけっこうたくさんいる。小学校と連携して学外演習で来れるのならば、その制度を滋賀県がつくってバスを動かしてくれるなんてことがあれば随分変わると思うんですが、まずは子どもたちは親に連れて来られないと来れない、その狭いターゲットでいいのかというのがひとつあります。もうひとつがおっしゃられていたように、10代以上や高校生になるとがぐっと美術館に行くという習慣というか意識が薄れてしまうというのがあって、そのまま美術館に行かない大人になるということがあります。子どもたちは教育熱心な親に連れてこられるけれども、それが果たして高校生まで続くのかと思うと、もう少し幅広い世代が使うような、来れるようなアートセンターという形など、幅広い世代が使えるほうがいいのではと思っています。もうひとつ、私、昨日まで石川県の珠洲市の方へゼミ旅行で行っていたんですが、そこで国際芸術祭で残されたアート作品を観て回るということをやったんですね。それを地元のおじいちゃんたちが熱心に愛情込めて解説してくださったりする。その人たちは作品が孫のように、8年経っても昨日のことのようにできあがったときのことを思い出すことや、地震をどう乗り越えて作品を守り続けているということをしごく誇りに語ってくださるんですね。そういうことを思うと、アートとの出会い

というのは子どもたちにとってももちろん重要だけれども、子どもたちだけでいいのか、もしかしたら退職された世代の人たちはまだまだパワーがある、何かしたいと思っているようなそういうような人たちを巻き込んでいくという視点というのにも必要なんじゃないかと思いました。全体まとめて言うと、アートセンターとしての機能、ワークショップルームとかインスタレーションスペースというような気軽さ、ここで自分たちの思いが実現するかもというような機能性を残しながら、もう少し幅広い世代の人たち、それから問題意識をもっている人たちともつながるようになるとよりよいんじゃないかと思います。

会長

ありがとうございました。今のご意見まず、子どもはひとりでは来ない、親が連れてこなければならぬ。しかし、横浜でも問題になっていますが、親に興味がないと子どもは来られない、子どもの間の経験格差というのが今の社会では問題になっています。その親への呼びかけの問題と、それを補うものとして学校が否応なく一斉に子どもを連れてくるのが重要になってくるわけですが、そうした制度を視野に入れるべきではないかというご指摘でした。滋賀県は真ん中に大きな琵琶湖があって交通が大変だというのはさんざん伺いましたので、そうした問題もあるかと思います。もうひとつはキッズと大人の間の世代をどうつなぐか、そしてシニアの活力も視野に入れるべきではないかというご意見でした。いくつか子どもにしばったことによるデメリットの中に、世代を超えたコミュニケーションが重要ではないかというご指摘があったように思いますので、資料の10ページのドロップインワークショップコーナーに書いてある、大人も一緒に楽しみ、世代間コミュニケーションを促進すると書いてあるこの部分について、今のご質問に対してどんなことを今事務局の方で考えられているのか伺ったほうがいいかと思いました。いかがでしょうか。

事務局

はい、ありがとうございます。キッズという名称自体が他の人たちを排除しているように捉えられそうだとご指摘いただきました。ごもっともだと思います。たとえばこのドロップインワークショップコーナーというのは、今現在も、企画展に付随するワークショップを実施しています。子どもが塗り絵している横で親御さんが塗り絵しているケースも多々見られますし、僕もそうですけれども子どもがやっていたら自分もやろうかなという雰囲気になる、大人しかやってなかったら格好つけるわけではないですけどやらないときもあるので、子どもが楽しそうにやっていると大人も交じりたくなるというか、親子連れでなくても大人だけでもありえるんじゃないのかなと。むしろ楽しい雰囲気を子どもにつくってもらうという試みというか狙いはこちらの方にはあります。委員からもご指摘ありましたけれども、子どもが楽しんでいる設えをつくるなかで、体を動かす楽しみもそうなんですけれども、子どもがものをつくるときに大人の世代と一緒にものをつくるような仕掛けをつくることもできるだろうと。キッズアートセンターの下にwith ポンピドゥー？と書いてあるんですけれども、今ポンピドゥーがキッズに関して非常にいろいろな展開をしまして、フランスのクレルモンフェランという町があるんですが、ミシュランの本拠地があるような街なんですけれども、そこにMille Formesというキッズアートセンターがありまして、そこは0歳児から6歳児がターゲットのセンターなんですけど、そこは親子連れが基本的に行くんですけれども、子どもだけを遊ばせるというよりは子どもと大人が一緒になってものづくりをする、大人が手助けをしてより大きなものをつくることで楽しくなったりする。下見に行ったんですけれども、親御さんも楽しんでいる場所です。なので、名称としてはキッズになるかもしれないんですけれども、親だって美術館に行ったことない人は多いと思うので、そうした人たちが子どもに連れられてアートに触れていくというの

狙いとしてはあると思っているところです。いろんな意見が出ていて、皆さんもいろいろ言うてくださるので、僕もぶっちゃけて言いますと、小中学生から高校生をどうシームレスにつなげていくか、もちろん課題としてあるんですが、自分が高校生の頃を考えても、高校生は思春期、反抗期なので、美術館に行きたくないならそれはそれでいいんじゃないか、ただ小中学生のときに行ったら、大学生になったら帰ってきてくれるかもしれないというところで。先ほどマンパワーの指摘があったと思うんですけど、今我々が0歳児、乳幼児、小中学生、高校生、大学生全部を扱うプログラムを企画運営するってけっこう難しそうな気はしています。今聞いていて高校生も大事だなと思いつながらも、その中でどうターゲットをしぼっていくかということも、現実的には出てくるのかなと思いました。取り急ぎ以上です。

会長

世代間の交流について、むしろ子どもを呼び水にして多くの世代が楽しめるのではないかというご意見と、現実的には的を絞らない限り難しいのではないかというご意見でした。

委員

先ほどのご意見にもありましたように、子どもに据えていきたいと、やはり最近子どもが主体で、行動が変わってくることってたくさんあると思うんですね。今開催されている大阪の万博も、確か、滋賀県の三日月知事が小・中・高校生全部連れていくとおっしゃっていたが、蓋を開けたら2月、3月の時点では、小学生、中学生、高校生の2割くらいしか手をあげておられなかった。先生方の引率の問題とかバスのアクセスの問題とかいろんな問題があったと聞いてますけれども。僕も先日、遅ればせながらに万博に行きましたけれども、1970年のときに10歳、小学校4年生のときに万博に行きまして、そのときアメリカの月の石をみるのに3時間くらい並んだ記憶だけあるんですけども、先日、行って思い出したのは高揚感と非日常感でした。万博で、10歳の時と今64歳ですけども、同じような感覚を受けた。小学生のときに覚えた感覚というのが55年後に残っているんだと思った。小学生の時に一度は足を運んでもらう、それが、たちまちどうなるかわかりませんけれども、10年20年30年したら、成長してまた子どもを連れてこようかということにつながる。ハード面はいいし子どもを中心にするのはよいと思うんですけども、子どものおられない方もいますし、そこは工夫をしていただいたらいいと思うんですけども、いかにソフト的な発信をされていくのか、万博もまったく行く気はなかったんですけども、周りから行かなあかんのちがう？と言われて、行ったらいいよとかいろんなメディアでやってますので、そういう発信も大事なかなと思います。特にいまはデジタルネイティブでほとんどが小学生からスマホを持っている時代ですから、いろんな形で発信されれば、こんな素晴らしい美術館があるんやな、そうしたら親も一回子ども連れて行こうかなとか、子どもがお父さんお母さんに連れて行ってよと言う場合もあるだろうし、そういうソフト的な工夫もされると自然と来場者が増えて、そこから口コミとかSNS等で広がって、私も一回行ってみようというふうにつながるんじゃないかと思います。

会長

ありがとうございます。

委員

重なるようなことになるかもしれませんが、キッズアートセンターという話を聞いて、僕はこれはいけるなと思ったんですね。というのは、子ども対象ということは、何があるかということ、遊

べる、触れる、体験できる、みたいなことの内容になると思って、そうなってくると見えない人とか、僕も含めて障害のある人も結構楽しめるスペースになるんじゃないかと思ったんですね。名前は子ども、キッズアーツだけれども、実はそこに行ってみたら結構、見えない人、障害のある人も楽しめるんだよという評判が広がるといいなと思いました。で、実際に行ってみたら結構体験できたり、触れたり遊べたりできるような空間というのが、いろんな人に楽しめるはずなので、子どもだけじゃなくて、そういう人にも開かれている、事前にそういうふうに評判ができていけばいいかなと思いました。

会長

ありがとうございました。観るに限定しない活動があることで、子どもさんが楽しめるけれども、視覚に障害がある方にとっても入りやすい、楽しみやすい施設になるのではというご意見でした。

委員

私もキッズアートセンターというプロジェクトですね、結構面白いなと思っております。ずっと話を聞いていますと常設的なものとして考えておられるのかなと思っておりますけれども。その場合、まだどうなるか決まっていないうですけれども、予算が必要になるとかということもあると思いますけれども、年に1回スペシャルな催しということで、例えば美術館祭りやるとか、そういったことをきっかけにやるとかいうことができるんじゃないかなと。今すぐにでもできることでは、親子で楽しめるとか、一般の団体と一緒にやるとかいうようなこともできるんじゃないかなと思っております。

それが一つと、もう一つは、これは美術館として、教育の場としてアートに触れるきっかけをキッズに提供しようということだと思うんですけれども、僕は逆にいろんなお子さんがおられると思うんです。障害持った方もおられますし、幼いながらもすごく美術が好きで、将来世界的なアーティストになる原石の子かもしれません。そういった子に対して、アールブリュットも含めて、美術をするための時間と場所を与える場所があってもいいんじゃないかなと。そういったことで美術館として協力できないかなということを考えてもします。

ものすごい美術が好きで、一般的なものには興味がないと、ただこれだけはやりたいんだと、そういった方に時間と場所を提供する、ものすごい知識をもたれた学生の方もおられますので、いわゆる教育できるようなこともできたらよいのでは。見方を逆に変えるわけじゃないですけれども、そういうこともできたらよいのではと思っております。いろいろと案は出ておりますけれども、キッズアートセンターについては、滋賀県にアートセンターがありませんので、その旨も含めてですけれども。京都や大阪でしたら廃校跡でしたり、庁舎の跡でしたりあるんですけれども、アートセンター的な機能はアートに接する機会になると思いますので、これはぜひ進めていただきたいなと思っております。

会長

子どもといっても遊びたいばかりではなく、本気で美術をやりたいような個性を持った子どももいるかもしれないというご指摘もありました。本日の一番大きな課題が、概念図の中心をなしているキッズアートセンターだと思いますので、全員の方にしっかりご発言いただけたのは大変良かったなと思います。

概ねすばらしいというご意見、ただし、子どものみに限定してよいのか、子どもの中にもいろいろいるのではないかと、あるいは子どもを呼び水にして障害のある方や世代を超えた方がやって来やすい

工夫も必要なのではないか等々のご意見をいただきました。

続きまして、「2-3 展示収蔵」についてご意見ありましたらお願いをいたします。特に美術館のほうからは、コレクション展示室について外光をとりいれるという考え方の是非、それから、2 番目のぼつ、アール・ブリュットコレクションの展示について、いわゆる他の美術作品に混ぜてしまう展示もあるのではないかと、独立させるべきではないかと。そして開かれた収蔵庫については委員からもご指摘がありましたけれども、こういった運用が果たして可能なかどうか等々について、特に皆様からのご意見をお伺いしたいと思っております。

委員

特にアール・ブリュットについてですけど、県立美術館のホームページにも載っていたと思うんですけど、滋賀県はこの分野に対して非常に先駆的な取り組みをされている県だと思います。やまなみ工房さんにたくさんの芸術家がいらっちゃって、県内ではたねやの山本社長がやまなみ工房さんの描かれた絵を包装紙として利用されているのがひとつある。それからとんねるずの木梨さんとのコラボもされているとか。滋賀県としては全国的にもそういうのが進んでいるというか、いろんな形で知られていると思いますので、アール・ブリュットというところに焦点を当てて、展示をそれだけ別のところでやるというのも一つの方法ですし、もっとそういう方にスポットライトをあてて、そこからいろんな美術家が育っていかれると思いますので、アール・ブリュットについてはもっと、2016 年からこの美術館は取組されていると思うんですけどもね、これからも強力に、作品群を収集も含めて是非とも発信をお願いしたいと思います。

会長

ここに書いてあるアール・ブリュットを独立展示室にしたいという趣旨は、滋賀県が誇る先進的な分野であり、混ぜるよりも独立させて発信しやすくするという考え方ではないかという風に私も理解しています。

委員

今お話に出てきましたやまなみ工房さんが、校区内にありまして、今年も4年生の子どもたちが社会福祉の勉強でやまなみ工房さんのほうにお邪魔させていただいて、展示されている作品を見させてもらって、子どもたちは目をきらきらさせながら作品を見て、触れて、そこでお話を聞いて、子どもたちなりに何か考えることもあるだろうし、すごく興味深い体験をさせていただいたということがあります。コロナ禍ですとできていなかったんですけども、それが復活して、今後もまた継続した活動にとなっているんですけども、早い段階でそういう作品に出会わせてもらうというのは子どもたちにとってもすごく意味のあることなんだなということを、子どもたちの様子をみて感じさせてもらった次第です。

なんでこういった作品が生まれて、こういった方が作っているというのは、ある程度説明をしてあげないと子どもたちには理解がしづらいと思うので、独立した展示スペースというのはすごくいいなと思っていますし、学校がこちらに来させてもらったときに、展示学習をしたうえで説明を聞かせてもらうことでより学びが深まるだろうなと思いました。それプラス、開かれた収蔵庫といったところで、そういったものを子どもたちが見る機会がないですし、他の活動も、図書館のバックヤードに入れさせていただく、それでこういう仕事をしてくださっているんだ、というのを学ぶ学習もあります。美術の展示をされている裏側を覗き見ることができるというのは、子どもたちにとってもすごく楽しい活動になるんじゃないかなと思いながら聞かせていただいていたいました。先ほどの活

動と、こういった活動が1日のうちに校外学習で体験させてもらってというのができると、なんて素敵な1日になるだろうなというふうに思いました。滋賀県は5年生でうみのことというフローティングスクールの活動があるし、4年生ではやまのことという山の活動を体験する活動もあるし、できたらアートの子なんていうのが県と連携して全員に機会が取り入れてあげられるような活動ができるとすごく素敵だなと未来を思い描きました。

会長

特にアール・ブリュットについて子どもさんの交流も進んでいるし、効果は実地で実感していっていらっしゃるし、ここを切り口にキッズアートセンターなどもすると子どもにとって素晴らしい一日になるのではないかなというお話でした。

アール・ブリュットに限らず、コレクション、この美術館は恐るべき現代美術のコレクションを実は持っていますが、なかなか展示されず活用されていないので、常設展示室の施設をつくるのか、あるいは開かれた収蔵庫で展示しきれないものを公開していくのか、この点についても何かご意見ありましたらお願いいたします。

委員

これについては、予算があつたらいいんじゃないでしょうか、という話ではないでしょうか。収蔵庫問題は日本中の問題なので。延々に増え続けるという悩ましい問題でもあるので。

外に出してもそこが埋まるから、今度その作品たちが帰るところがなくなっていくので、将来的にはまたどこかに必要というのは見えているので、そのタイミングがどこで来るか、今回この計画にそれを盛り込んでいるかというだけの話かとは思いますが。収蔵展示もやってるところもある、しかしやろうと思ったらお金はかかるし、大変だろうな、ということ以上は、ここで話したところで意味がないような気がして聞いていました。

会長

もちろんできれば素晴らしいけど、お金の問題と覚悟の問題、委員のご指摘の覚悟の問題ということですね。収蔵庫問題は美術館にとって致命的な問題なのですが、具体的に収蔵を解決するというだけではなく、展示されているもの以外にもすべての人にアクセスする権利があるよという考え方から見る収蔵庫という考え方が強く出てきていて、日本ではなかなか実施されていないので、もしご予算と人手と覚悟が揃ったなら、滋賀県立美術館が実現されるのであれば、すごいことになるのではないかなと思いつつ話を伺っていました。

委員

概念図の続きでもあるんですけれども、キッズアートセンターということに絞ってということですが、要素が多いんだなということを改めて感じました。全部をフォローしようとなると、相当労力とコストがかかるし、美術館のスペースとしてもこれを十分に見せようとなると、今の3倍ぐらいいるんじゃないかなという雰囲気を感じました。できるのであれば、僕も、様々なところに目が向けられれば、面白い美術館になるんじゃないかなと思うんですけれども、限られた予算であつたりとかということを考えた時に、どこに優先順位を持っていくのかということは重要だと思っております。キッズアートセンターが真ん中にあることも重要なのだろう、アール・ブリュットも重要だということだと思いますけれども、そのあたりはどういうふうにお考えなのかということは美術館にお伺いしたいなと思います。昔からアメリカの現代美術だったり、滋賀ゆかりのものだったり、収

蔵の方針が 1 個ずつ増えていっているというイメージも持ちますので、増えれば増えるほどカテゴリが肥大化していっているような印象にも感じました。このあたりは懸念点として思っております。

委員

収蔵庫がいっぱいになってくるということで、美術品が一旦美術館の収蔵庫に入るとそこから動かないという印象を受けております。多分できないと思うんですけども、美術館の運営費も高くなりますので、一旦美術館に入ったものを売却して、次の美術品を買うとか、動かすことは無理じゃないかと思うんですけども、そういうことができるのかなと思ったりもします。

アール・ブリュットコレクションが相当いいものがあるというのは聞いていますので、例えば学校ですとか、公共スペースに貸し出すとかいうことでいろんな人に見てもらえるかなと。これは実際されていると思います。アール・ブリュットの作品いろんなところで見たりしますので。そういったことも活性化されたらどうかなと思ったりしております。美術館以外に、美術館で収蔵された作品を見る機会が増えている。そういう機会がより増えてくるとよいのではないかと思います。

会長

収蔵庫に限らず、活用の方法や、売却は非常に美術館では難しいことではあるんですけども、柔軟にプレストをしてみてもというご意見だったと思います。

委員

コレクションの展示室ですけども、現代美術を展示する展示室としては天井高が低くて、せっかくの大規模な作品がよく見えないというのが残念です。

是非天井高を高くして、展示スペースを広げていただきたいと思います。コレクション展示室よりも企画展示室のほうがだと思うんですけども、企画展示室の平米数が 900 を切るぐらいなのは狭いのではないかと。巡回展を受け入れる場合に、東京の改修された美術館は 1500 平米ぐらいの面積を持っておられて、そこで展覧会が構成されたものが巡回してくるので、当方の勤める美術館でも、1000 平米弱ぐらいの展示室がありますが、収まりきらない展覧会もありますので、企画展示室をもうちょっと広くしていただければと思います。アール・ブリュットの展示室を特別に設けたいということですけども、私も同感です。特別扱いすることで通常の美術とは違うという扱いをしているとみなされる危険は確かにあるものの、一般の方、子どもさんなどもまだ理解がされていないと思いますし、アール・ブリュットというものを正しく理解してもらうためには、しばらく独立して展示して、他の美術作品とは異なるという文脈で理解されている作品だということを示していかなければいけない。

開かれた収蔵庫ですけども、管理だったり光の問題だったり気になることも多いのですが、展示スペースの確保というのもあるでしょうし、学芸員の仕事に理解を得るということもあるでしょうし、意義があると思います。一方で館内の方々の仕事の妨げになってしまうということになっても困るので、公開できる部分と、非公開の部分と、両方を持ち合わせた収蔵庫になってくれるとよいかなと思いました。

会長

企画展示室の面も考えなおすべきではないかというご意見でした。

委員

アール・ブリュットコレクションの展示に関して、もちろん作品をじっくり見たいと思います。と同時に滋賀というところを考えると、研究施設といえますか、アール・ブリュットに関する、何か調べものをしたい、研究したいという世界中の方々、新しく出会う学生たちが、ここに行けばすべてわかるという具合に研究施設といえますか、資料の貸出等々、滋賀県が積み重ねた研究の分野をアクセスできるような形にしてもらえるとありがたいし、他との違い、他にもアール・ブリュット美術館という名前を冠したところがありますが、研究施設としての展示ということを期待しております。

委員

収蔵庫には、何回か入らせてもらったこともあるんですけども、休館日だったり閉館後に、ちょっと特別なところに入っていった作品を探してもらったことがあったんですけども、なんとなく資料的なとらえ方というか、特別なイメージがあって。大きな作品があるとか聞きました。普段普通の展示会場ではできないことですけども、大きい作品を触る、たとえば脚立にのぼって普段上まで触れないところまで触ってみるとか、そういうちょっと特別な体験ができるようなことも可能なのではないかな。そういうことが実現できるとよいなと思いました。ちょっと夢物語なんですけど。

会長

展示の際に収蔵庫に実際に入られて作品の調査をされていらっしゃるのでその経験のお話でしたね。

委員

見える収蔵庫、見える化するためには相当設備を加えないといけないだろうと。昨今のIPMの考え等入ってくると一般の人が見える収蔵庫に入ってくるという導線の問題とか、保存環境の問題とかもあるので、相当の設備的な投資が必要だろうと思っています。それはそれとして、コレクション展示ということでは、最初概念図というのは単に設備配置というのではなくて、あそこからすべての館の運営の発想を延長してくるということだと思うので、じゃあコレクションを展示するときに、単にワークショップをするためのキッズアートセンターというわけではなく、そういうものを設置する考え方というものが、じゃあコレクション展示のほうにはどのように入ってくるのか。つまりあれは概念図とありましたけど、いわばコンセプトですから、コンセプトというのは全体に貫かれるものだとは私は思うので、そうすると展示に関してはどんなふうにそれが反映されるのか。単に子どもというだけではなくて、初心者であったり、そういう人たちも幅広く接触できるというか、入り込めるということだと思うので、単に体験学習のスペースを作ることだけではなくて、そこからできた発想がどのようにコレクション展示に反映してくるのか。単に子ども向けに改修しようと単純なことを言っているわけではなく、そこからの発想が特にコレクション展示の、なんらかの設備関係にも反映されるというところがあるのではないかな、具体的にすぐには思い浮かばないのだけれど、あっていいかなというように思いました。

会長

今のお話を伺いますと、キッズアートセンター、コレクションの展示、アール・ブリュットの展示、開かれた収蔵庫すべてがどう連携するのかということをきちんと考えていくべきというご意見だったように思います。

コレクション展示室、アール・ブリュットコレクションの展示、開かれた収蔵庫、いずれもお金と人と理念が伴えば、絶対反対という方はいらっしゃらず、むしろよりよい方向で進めていただければ

というふうに理解をいたしました。事務局から補足がありましたらお願いいたします。

事務局

開かれた収蔵庫に関しては、特にうちの場合は収蔵庫を開くというのは、展示室に収蔵機能を持たせるみたいなのがあると思います。僕のほうも韓国のチョンジュ、ロンドン、ロッテルダム等々事例を見てきてるんですけども、やはり入らせていただくことで作品を守ることの大切さとか、同じ市民県民だったら自分たちのエリアの美術館がこれだけのものを大切に持っている、あるいはここにある作品は自分たちの資産でもある、ということが分かることになると思うんですね。それは通常の展示という機能の中では感じとれないことなので、おそらくそういう意味での収蔵をみせることの意義はあるのではないかなと思っています。もちろんゆくゆくは収蔵庫はパンパンになるんですけども、今愛知県が陶芸美術館と県立美術館の共同の収蔵庫の計画を立てているように、おそらく今後いろいろな自治体のなかで、ここ滋賀県も複数の美術館博物館があるわけですけども、単独で収蔵庫を持つのではなくて、そういう形で整備していくという流れになっていくのかなと思っています。それは滋賀県に限る話ではなく、愛知のような他県の事例を踏まえながら、数十年後に考えていくのではないかなと思っています。

会長

もう一つお考えを伺っておきたいのが、アール・ブリュットなり、あるいは現在では評価額 100 億を超えるであろう現代美術コレクションが、現在ではうまく展示できていないという問題を解決するために、固定展示で特色を出していくということを考えておられるようですが、そこについても一言だけコメントをいただいてもよろしいでしょうか。

事務局

今まさにクリフォード・スティルとマーク・ロスコを同時に出していて、それはかなりうちとしては珍しいんですけども、しかも天井高が4mしかなくて、ぎりぎりのところというのが実情です。京市美さんの高い展示室をいつもうらやましく思うんですけども、ああいう空間で作品を展示することができたらそれだけでも来てよかったというようなものになるかもしれません。ただ、マーク・ロスコ、クリフォード・スティルといった美術史上有名でも、一般の人に知られていない作品だけだと弱いところはあると思うので、目玉となる常設作品と書いてありますけれども、もう少し訴求できる形での作家作品の常設というものも考えていって、来たいと思ってもらえる場所にすべきだろうと思っていますので、そのあたりについても皆さんのご意見伺えればと思っています。

会長

美術館はたくさんの作品があるので入れ替え、入れ替えしたほうが新鮮で来やすい場合と、固定されていて売りになるから他県からもそれを見に来る、こちらも発信をしやすいという考え方の作品と、2種類あるかと思います。金沢 21 世紀美術館のプールや、青森県立美術館の奈良美智さんの大きな青森犬のように、シンボルとなる、みんなが他県からも来たくなるようなものも含めて固定展示という新しいアイデアをお持ちというふうに理解いたしました。

次に「2-4 利用者に開かれているスペース」と、「2-5 公園と一体となるスペース」につきましては、一体になるテーマだとは思いますので、一緒に議論をしていければと思います。特にペーパーをご覧になっていただくとお分かりになるように、これまで皆様から出していただきました具体的な意見が、かなりすでに盛り込まれた内容になっておりますので、本日はこれ以上に新しい観点からの

ご意見があれば伺う形にしたいと思います。

委員

図書館との連携、ソフト面でいくつかやっておられるというのは事業報告書を見て思ったんですけども、ハード面でそことの連携をとったりだとか、いわゆる研究施設みたいな、アーカイブみたいなものというのは、図書館と連携することでプッシュできるのかなと。図書館にくるお客さんをこちらに引き込んでくるような導線だったりとか、すぐ近くにあって向こうのほうが結構利用者多いと思うんですけども、その連携がなにかハード面でできないのかなと思いました。

会長

図書館との連携、アクセス数の向上などが重要ではないかというご意見でした。

委員

（本日の資料２の「教えて！もっと行きたい美術館！」の小学生の部グラフィックレコーディング「こんな風にすごせたら…と思うこと」に「くら寿司とかチェーン店入れる」という意見があることを受けて）くら寿司があればいいと思います。うちの奥さんと喋っていて、くら寿司、はま寿司があったら絶対行くんやろうなという話をしていました。隣にあれば、キッズアートセンターもそうなんですが、そこに行って、子どもはワークショップに任せて、じゃあどうするか、何かするか。しない場合は待ってないといけないから、じゃあそこにいい感じのカフェがあればそれですむのか、でも結構人が来はじめるとそこもいっぱいになるからじゃあどうするかっていうその感じなんですよ。図書館の話も一緒に、つながっていてずっと涼しい中だったら、夏だったら図書館も行こうかなと。そこまで行って美術館の作品が並んでたらそれはそれでいいやとか。今回の全部の話、さっき言ったアートセンターは、別のほうがいいということと言ったんですけど、個別にここに行こうというのが、図書館に行こうもあまり恰好よくないし、美術館に行こうもあんまり恰好よくないから、行こうと思えるエリアみたいになったほうがいいんじゃないかな。そこに足りないのがごはんを食べるところなので、くら寿司、はま寿司来てくれたら最高だと思うんですけど。それがあればお客さんもくるので、というようなことがアイデアの中に入ったらいいかなと思いました。できるかどうかかわからないですし、縦割り行政の関係とか、公園との調整とかいろいろあると思うんですけど、こんだけお金使うんで、滋賀県としてこの地域全部を考えなおしませんかという話にしたほうが通りやすい感じがして聞いていました。

会長

食事の問題を含めエリア全体を複合的に遊ぶ、一日中遊ぼうというふうになるように考えてほしいというご意見でしたね。

委員

隣に県立体育館、ダイハツアリーナがあると思うんですけど、前の勤務先に女子バスケット部がありまして、これからの国スポで優勝目指して頑張ってくれているんですけども、社会人リーグに入っていて、全国からダイハツアリーナに試合に来てくれるんですけども、皆さんおっしゃるのがコンビニもない、食べる場所もない、不評で困っています。だから美術館もそうですし、文化ゾーンと呼ばれるこの一帯ですね、飲食施設がないというのが一番の家族連れが来にくい課題かと思います。キッチンカーはたまに呼んだりしているんですけども、県立施設でどこまでのこと

ができるかはわからないんですけども、多少そういうところをつくらないと、美術だけでは人は来てくれないんじゃないかなと。やっぱり一日、お昼を食べながら、また昼からもここでゆっくりとなると、やはりどうしても飲食の施設が必要になるかなと。できるできないはわかりませんが、ぜひ夢を求めてご検討ください。

会長

思った以上にお腹の問題は大きいですね。

委員

この公園ですが、ある意味とても恵まれた公園じゃないかなと思っています。美術館のある公園として考えた場合に。例えば京都岡崎公園ありますね、京セラ美術館の前に。駐車場お金払わないと入れません。結構いります。美術館入るのにもお金いります。この美術館、無料の駐車場あるわけですね。で、美術館にものすごく入りやすい。そういう意味ではすごく恵まれた公園であり美術館であると思います。公園で考えたら、京阪神からも近いし、高速道路からも近いし。

滋賀県の公園で、希望ヶ丘でも駐車場料金とります。500 円ぐらいかと思いますけど。そこでも結構公園いろいろ使ってますね。土日にフリーマーケットやったりとか、年に何回かお祭りやったりとか。

ちなみに人の集う環境は向こうのほうが勝ってると思います。岡崎公園なんか最近ものすごい数が多いんで。ほとんど毎週土日ぐらいアートマーケットですとか蚤の市ですとか、食のフェスティバルですとかいろんなことやってますね。そういうようなこと考えてみますと、この公園も何年前、キッチンカーみたことありますけど、単独でキッチンカーやってもなかなか人きませんね。例えばアートマーケットとセットになってるとか、大道芸ですとかね。インディーズのコンサートとか、そういったものとセットにしていくと、結構盛り上がったりしますね。

何が言いたいかというと、結構恵まれた素材だと思います。駐車料金がいらないというのと、美術館のホワイエも含めてね、滋賀県の中でもこれだけ広い面積があって、こんなに立派な池があって、これだけ散策できる場所があって。駐車場から美術館まで遠いとかいう不評もありますけど、アート作品的なものにひっかけて、例えば北駐車場から美術館まで屋外アート作品と一緒に周遊するなどそういうことをやったりとか。貸し出したりとか難しいかもしれませんが、いろんなイベントに使っていただいたりとか、年に何回かお祭りみたいなことがあると人が集うことになるんじゃないかと思ったりもします。ものすごく恵まれた環境を活かしきれてないというのが正直思います。美術館だけでなく図書館も埋蔵文化財センターもありますしね、スペースもあるわけですから、植物園ではないですけども、年間通していろんな植物がみられるようになると人も増えてくるんじゃないかなと思いますしね。

大学と連携してやるとして考えていくと、京都府立植物園なんかは府立大の農学部と連携しているやってるみたいですけども、この公園でしたら近くに龍谷大学農学部というのもありますし、連携として何かできないかと思ったりもします。素材としてはとても恵まれた美術館、公園であると私は思います。

会長

非常に恵まれた素材なので複合的に活かすべきところがあるのではないかというお話でした。

委員

一番気になるのは評価、成果目標をどう立てるかというところです。私自身、地域創造の取材などをしておりますので、地域の人たちにとって必要な美術館、地域の人たちが当事者感覚をもって美術館にくる、サービスを受ける場所じゃなくって、自分たち自身のものだ、自分たちが運営していく場所なんだという意識を持ってもらうというのがいいかなと思っています。

ジャストアイデアなんですけれど、美術館や文化施設って来てくださった人の意見というのは聞けるんですけども、来ていない人たちの声は収集しにくい、大変だということが分かっているんですが、できれば周辺の人たち、周辺の学校の人たちで結構ですので、来ていない人たちがなぜ来ていないのかというような調査なり成果というものを継続してやっていけると、来ていない人たちに来てもらえるような作戦をたてられるなというように思っています。私たち委員で集まっている人たちというのは、美術が好きで、ちょっとした苦勞、アクセスが悪いとかその程度のことは苦ともせず行くと思うんですが、本当に来ていない人たちが何を考えているのか、感じているのかということを知れるような調査なり、アクション、成果目標というものがたてられるとよいかなと思っています。

会長

「2-7 成果目標や評価」をどう立てるかということについて、時間ぎりぎりまでご意見をいただきたいと思います。

委員

成果目標とか効果をどうするか、これ一種の説明責任というか、県や県民の皆様にご改修したことでこういう効果がありますというような説明をしなければいけないということだと思っんですね。あるいはその後の運営において、このように向上しましたというようなことの説明をしなければいけないということの一環だと思っんです。活動の評価というのは細かくたくさんありますよね。うちなんかでも、地方独立行政法人の博物館機構から市のほうに最終100項目ぐらいいろんな項目があって、今年はどうであったかというところを評価するみたいなところで。それがすごく労力がかかる割にはどうなんだろうという気がしています。静岡県の資料も今回添付していただいているんですけども、例えばここにあるような利用者数だとか、展覧会の満足度とか参加数、こういう数字をもつということは重要だし、今後の運営にこういうことを生かしていくという意味で、調べること、そういうことを持っていることは重要なんだけど、それを目標にするものなのかどうなのかというふうにもいつも思っています。ですので、目標とか評価ということは、こういうことをやってこういう成果がありましたということは、私たちがやりたいこと、つまりここで滋賀県立美術館がこういうことをやりたいということを目標にすべきであって、客観的な数値をたくさん集めることではないと思う。今年はこれを目標にして従来の数字がここまであがった、あるいはこういうような評価が増えたというようなことが成果になると思っんですね。今一般的にされている評価というのは、客観的な数字を100項目も集めてですね、これが評価ですというようなことをやっているんだけど、経営学が何かわからないけれども、そういうところの考え方をいれた評価だと思っんですけれども、もう少し自分たちがやりたいこと、それに対してどう変わったか、どんなふうにというところが一番の問題なのであって、あんまり客観的な数字に走らないほうがいいだろうなと思っています。

会長

美術のような心の充足感にまつわる問題を数字の評価でいかに表せるかというのは美術館業界がこの2、30年苦しんできたところですが、数字に縛られるのではなく、目標に沿った変化を生じてい

るか、あるいは付け加えますとそれが今後のさらなる変化にどう生かしていけるかのほうに重点を置いて考えたほうがよいですよというお話だったと思います。

来ない人の来館者調査というのもとても重要ではないかというご意見もございました。

委員

そもそも美術館を建てる時点で、特にアートっていう時点で、とても不平等なところなので。いろんな意味で。それを県として市として持っているということで、集めた税金をできるだけ平等に使わないといけないという意識を持とうとすればするほど、今日あったようなキッズに集中するのはどうなのかという話になっていってしまうんですけど、それを追求すると、結局日本国中の美術館が同じになってしまうというすごい大きな問題があると思っていて、個人的な意見ですけど。ということで、どうやって測るかということも結局みんなが同じ問題を抱えていて、増え続ける作品と、大きくなり続ける収蔵庫と、少子化で減り続ける来館者数とをどうやって正当化していくかみたいな、絶対に勝ち目のない戦いをしなきゃいけないということはそうなので、じゃあそれをどうやってポジティブに考えるかということだと思うんです。県会議員の方々がそれでもやるべきであるというポジティブな楽しい話にもっていく、それでもだめと言われたら、この美術館はこのままで、どんどん来館者数が減って、老朽化して、それも直さないで、このまま維持するのでもいいのですか、という話に。これは最初に作ったときの意思の問題になってくるから、そこはそうですよといいつつ、とはいえ私たちはこの施設をととてもよくしていきたいので、そのためには今私たちが思っている一番よい方法はこれです、こんなに楽しそうな、こんなに素晴らしい案があるんですというストーリーに見えるように作らないといけなくて、そこについてくる数字は客観的に見えないといけないと思うんですけど、そこにこだわりすぎるとただただ面白くない数字がならんで、今日のこの会議の始まりのときみたいな、みんなでどんよりとなりながら頑張りましょう、みたいな感じにならないように、ということで、楽しい会で、当たって砕けろで頑張りたいという決意表明で、今日はありがとうございました。

会長

今のご意見は根幹に関わることでして、なんで工事が終わったのにまた拡大する計画の話をしているのか、このままだとかつかつ低空飛行をなんとなく保つだけになるけれども、ここで大きく変身して、だれにとってもあってよかったなと思える施設を持つんだという強い意志をみんなで確認しましょうということでしたね。励みになります、ありがとうございます。

委員

組織として一体何が変わったのかということを反省したり、目標を新たに立てたりする必要があるということはあると思います。どうしても管理者側というか、あるいは資金を投入した側からすると、展覧会の入場者数だったり収益だったり指標のすべてになってしまうということがある。お客さんの立場からいくと充足感、来て、体験して満足したか、施設が使いやすくて満足したか、展覧会を見て、体験をして満足したかということに偏ってしまう。一方で専門家の方々に意見を聞くと、そんなことより展示の質だったり、研究成果が出ているかだとかいうことで、立場が違くと尺度が異なってしまうんですね。なので、やっぱり一つの指標だけでなく、複数の指標を私たち美術館が見出して、それを組み合わせながら、それは数値で測れないものもあるんですね、社会的な貢献に取り組んでいるとか、文化的排除みたいなものに対する取り組みとか、そういうものもどれくらい達成されているかという新しい指標もできてきましたので、いろんな要素を私たち自らで参照して、

それを組み合わせて数値目標を作っていくしかないのかなというように思っています。

会長

単に来館者が増えた、収入が増えたではなく、複合的な人がこういう意図で来ているのかという把握等が重要だというお話でしたね。

そろそろお時間なんですけれども、私も一言だけ。同じような話を当館でも議論しているんですが、全体の利用者数の把握は重要なんです、その中で、特にここに書いてある子どもや障害をもった方がどれくらい来てくださっているか、そしていろいろな施策をやった結果、その方たちがどれだけ増えたかの把握がとても重要だと思うようになりました。なので全体で何人来たかよりも、どういう人が何の目的で来てくれたかを把握することが、本来の成果目標の達成にとって重要なのではないかなというように思いました。経済波及効果について、最近とてもおもしろいインタビューを読んだのですが、すぐに経済波及効果だという話になるんですけれども、その手前にやるべきことがある。それは、その地域に美術館があってよかった、いい街だなあ、もっと住みたい、だから他の人にも来てほしいというローカルの意識を育むことなんだという話だったんですね。それがなければ他県からも来てよ来てよ、来てくれたらおもてなししましょうというマインドにはならないということなんです。なのでまずは滋賀の方々がこれだけこの施設があってよかったと思われるかがやはり評価の鍵ではないかと思いました。

最後に一つだけ。当館がリニューアルオープンしました。とても大きな施設で、セザンヌやピカソがあって、子どものプログラムもたくさんやっているところを、近隣の市の美術館がない市長さんが見学に来られて、帰りにうなだれて帰られたんですね。どうしてですかと聞いたら、隣の市なのにこちらの市の子どもは生まれた時からたくさんの作品に親しんで、ワークショップなどを経験して育つんでしょう、でもうちの市の子どもはそういう経験できないんでしょう、隣の市に住んでいるというだけで子どもの時にこれだけ経験の差ができてしまうと、大人になった時の可能性も大分違ってしまうということでショックを受けましたと言われたんですね。どうしても今の時代、税金の無駄遣いなんじゃないかとか、市民に嫌われてるんじゃないかとか考えてしまいがちなんですが、実は美術館がある自治体の子どもというのは、とてもとても幸せなんだということを、改めて我々のような委員会が覚えておくというのはとても重要なんじゃないかなと思いながら今日のお話を伺いました。

まだまだご意見おありかと思うのですが、12時を2分ほど過ぎてしまいましたので、本日の議論はここで締めさせていただきます、事務局にマイクをお返ししたいと思います。

事務局

ありがとうございました。

皆さん本当に長時間にわたり貴重な意見をいただきましてありがとうございました。

これを基に、よりよい素案を作って、議会のほうに提出していきたいというふうに思っております。委員からもありました、うみの子、ホールの子という事業を滋賀県でやっていて、そこに美術館をぜひ組み込んでほしいという声はよく頂戴します。一方で学校現場では、うみの子もホールの子もあるので、そこに美術の子も組み込めるのかという声もちらほらと聞こえてきているところに、その学校現場にいらっしゃる委員からあっていいんじゃないかというふうに言っていたことはとても心強いですし、一方で踏み込むのは大変だと思われる現状は我々美術館がまだいろんな意味で届いていない、活動も届いていないし、子どものために開かれている場所だということが届いていないということだと思うので、そこに美術の子も加えてもいいんじゃないかと思っていただけ

るような、新しい美術館にしていきたいと思います。整備基本計画はロングスパンなものではあるんですけども、早めに着手できるものに関しては早めに着手していきたいと思っていますので、今後とも皆様のほうからご意見いただけますと。今日はどうもありがとうございました。